

CONTENTS

企業・労働組合向けワークショップ開催 ..... 1-2  
 「長期療養シリーズ」5冊目発行 ..... 2  
 シンポジウム「医療とジェンダー・セクシュアリティ」 .. 3  
 from friends of + 抗レトロウイルス治療と予防 ..... 4  
 from APN+ APN+便り ..... 4  
 これからの活動予定 ..... 4

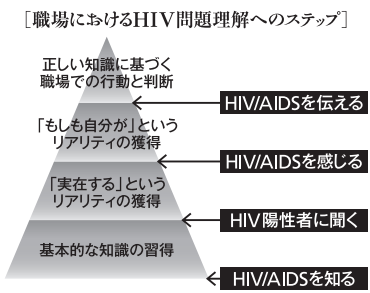
## 企業・労働組合向けHIV/AIDS啓発ワークショップ

企業内におけるHIV/AIDSの理解はまだまだ浅いと言わざるを言えないのが現状です。就労はもちろん、就労後に感染がわかった場合など、問題は多岐にわたります。この現実にも少しでも風穴を開けるべく、JaNP+ではプログラムを開発してきました。その一端として08年12月に関連団体と連携してイベントを開催いたしました。



### 企業・労働組合向け HIV/AIDS啓発プログラムの開発

職場では、様々な人々が働いています。しかし、そうした多様性は必ずしも可視化されるものではなく、無理解や差別・偏見が生まれているかもしれません。そこでJaNP+は、企業および労働組合を対象としたHIV/AIDS啓発プログラムを開発しました。このプログラムは、基本的な知識の提供、HIV陽性者によるスピーチや手記のリーディング、そして参加者が自ら情報発信者の立場を経験するワークショップによって構成されています。



HIV陽性者が当事者として企画から運営まで関わることにより、多様性への気づきと共感を高めつつ、HIV陽性者の人権啓発と職域における予防介入を目的としています。

### イベント「HIV陽性者が語る職場とエイズ」

2008年12月16日、世界エイズデーにあわせて開催されたイベント「HIV陽性者が語る職場とエイズ」(主催:NGO-労働組合国際協働フォーラム HIV/エイズ等感染症グループ)において、このプログラムに合った企画を提案し、実施することができました。

日時:2008年12月16日(火)  
 場所:東京都千代田区 総評会館3階  
 参加対象:一般、労働組合員、NGO関係者  
 定員:40名  
 プログラム:HIV/AIDSの基礎知識、HIV陽性者スピーチ、手記リーディング、ワークショップ「ポスタープロジェクト」

◎参加者アンケートより

1. HIV陽性者のスピーチを聞いて

- 周りの人のちょっとしたことが陽性者の方に力を与えることがあった。陽性者のサポートとこれからの予防が重要。

- 陽性者がストレス無く職場生活を送るには、まだまだ多くの課題があるのだなと。周囲の人の受け入れ方が大切で、職場でも同様なのだろうと思う。
- 自分になった時にどう対処できるか考えさせられた。
- 自分がHIVであることを受け入れるにはとても長い時間がかかることを印象深く思いました。
- 服薬や通院など、気付かないところで、職場の人に公にせずに仕事を続けることの難しさが分かった。
- 聞いて見て、初めて具体的な行動をとらなければと感じた。

### 2. ポスタープロジェクトに参加して

- 様々な意識、捉え方の違いを感じました。
- 実際にやってみることで自分の理解を知らしめられる。
- ポスターを考えることで自分なりに今日学んだことを整理できた。
- グループ内の検討を通じて、様々な考え方、感じ方があることが分かったのが収穫であった。
- 職場に陽性者というのは近い将来の課題だと思います。
- 大変なためになりました。自組合セミナーでも他のテーマでやってみたいと思いました。
- 人に伝えるということは本当に難しいことだと感じた。ポスターを見て、HIV陽性者がどう思うのか、伝わるのか、考えさせられました。人に伝える、という意味では組合活動にも生かせると感じた。HIVについて単組でも何らかの取り組みをしたいと思います。

### 3. その他

- とても難しい課題で自分が何をできるか分からないが、HIVを考えるよい機会となった。
- もっと幅広く、いろいろな世代に伝えることが大事だと思う。考えを止めずに、いろいろな人に伝えていきたい。
- エイズをよく理解していなかった。
- まだまだ浸透されていない。社会全体(企業、団体、地域)がしっかりと推進していく必要がある。
- 「知る」「感じる」「伝える」という構成に感銘を受けた。
- 当事者からの生の声は大変良かったです。職場、社会に生の声を伝えていくこといっしょに歩むことが大切と感じました。

## 主催者から一言

山口誠史氏 (NGO-労働国際協働フォーラム・HIV/エイズ等感染症グループ)

NGOと労働組合が協働して世界の貧困削減に取り組む「NGO-労働組合国際協働フォーラム」の中で、私たちHIV/エイズ等感染症グループは、2004年以来、労働組合員を主な対象として、HIV/エイズに関する理解の促進や差別・偏見の削減のために、様々な取組みをしていきました。その中でも、体験型のワークショップは、普段HIV/エイズを自分とは関係の無い遠いものと考えている人々に、理解と気付きを促す手段として重視してきました。

今回のJaNP+さんに協力していただいたワークショップは、参加者からとても高く評価されました。

陽性者スピーチでは、多くの参加者がはじめて陽性者から直接話を聞く中で、周囲の人々のちょっとした気遣いが陽性者に力を与えることが分かった、前向きに生きていこうとする陽性者の姿勢に心を打たれた、といった感想が聞かれました。

また、グループに分かれて取り組んだ「ポスタープロジェクト」では、たまたまいっしょになったグループで初めての人と協力しながらポスターを作っていくという作業を楽しみながらも、人に伝えることの難しさを感じる参加者が多かったようです。

今後もJaNP+さんが長年培った経験を、当グループを含めて、いろいろな場で活かしていただくことを期待しています。どうも、ありがとうございました。

# 「長期療養時代の治療を考える ～生活・健康・医療～」発行

Booklet

HAART (多剤併用療法) が開発されて、HIV/AIDSは「死の病い」から「慢性病」へと変化しつつあります。長期化する治療に感染者はどう向き合っていけばいいのか、その一助として今まで冊子を発行してきました。先般、この5冊目に当たる冊子が発行されました。

## 6年にわたる「長期療養シリーズ」

効果の高い薬の登場と医療体制の整備により、私たちにHIVは長期的な視点で向き合い、ともに暮らすことが前提となりつつあります。そこでJaNP+では、特定非営利活動法人ふれいす東京と協働して「長期療養時代シリーズ」プロジェクトを2003年より実施しています。このプロジェクトでは、これまで、「服薬と生活」(2004年)、「ストレスとつきあう」(2005年)、「長期療養生活のヒント」(2007年)、「人とつながる社会とつながる」(2008年)などの冊子を発行し、様々な団体・機関・施設・個人などにお届けしてきました。

5回目を迎えた今回は、陽性者のみなさんにWEBアンケートにご協力いただき、陽性者の医療と健康に対する現状と考え方について、調査・分析を行いました。そして、この調査結果を、冊子「長期療養時代の治療を考える～生活・健康・医療～」にまとめ、2009年3月31日に発行いたします。また、すでにWEBやE-mail、チラシ等でご案内しております通り、冊子の発行にあわせてシンポジウムを開催し(2009年4月19日、サンシャインシティ文化会館)、調査に関するご報告のほか、調査結果に関する医療従事者や陽性者からのコメントや意見交換を行います。

長期療養時代シリーズは、すべての段階においてHIV陽性者が中心に関わり、他にはない陽性者ならではの視点を取り入れた内容となっています。陽性者の皆さんだけでなく、その身近者の皆さんやHIVに携わる医療従事者や支援者の皆さんにも役立つツールになると思います。

なお、WEBアンケートでは多くのHIV陽性者にご参加いただいたほか、前回に続き鳥居薬品株式会社の後援と、放送大学准教授・井上洋士氏による専門的な調査・分析など、今回の「長期療養時代シリーズ」も、多くの方に

ご協力いただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

## 後援の鳥居薬品(株)より

加納光裕氏 (鳥居薬品株式会社 プロダクトマネジメント部 HIV領域担当)

長期療養シリーズは、「長期療養生活のヒント～それぞれの経験と予測～」(2006年)、「人とつながる社会とつながる(医療・職場・恋愛・将来)」(2007年)、今回の「長期療養時代の治療を考える～生活・健康・医療～」と3年前から参画させていただいております。

当初、地方のHIV陽性者の方々は、他の陽性者の方々とアクセスの仕方がわからず、情報の共有化ができずに悩んでおられるとの声も聞き及んでおりました。そこで、弊社がこの冊子をエイズ拠点病院等を通じて配布することにより、全国のHIV陽性者の方々のお手元に届きたいとの思いから参画させていただきました。

HIV治療は、HAART(多剤併用療法)が確立し、また効果の高い薬剤の登場により治療に劇的な変化を遂げ、長期にわたり療養生活が可能になりました。しかし、残念ながら現在の医療技術を持ってしても完治には至りません。したがって、現状では一度抗HIV薬の服用を始めると、ほぼ一生、薬とつきあっていく必要があり、「長期療養＝長期治療」という視点で私共は捉えておりました。

しかし、本シリーズの企画・立案から携わらせていただき、長期療養を続けていく上では医療との係わりだけでなく、保健、福祉、支援など様々な部分との係わりの大切さを知りました。

本シリーズは、実際にHIV陽性者の方々にアンケート調査を実施し、HIV陽性者の方々の視点から様々な部分との係わりについてまとめられています。また、HIV陽性者の方々の過去・現在・未来に向け、抱えている不安などにも触れられています。

ぜひ、この冊子をHIV陽性者の方々は元より、医療従事者や支援者の方々にも一読していただけるように、弊社としても今後も微力ながら貢献できればと思っております。



# シンポジウム「医療とジェンダー・セクシュアリティ」

Sexuality & Gender

日本は、医療・保健とセクシュアリティ・ジェンダーとの関連について、あまり深く認識されていない状況にあります。そのことが、例えば医療現場では、医療従事者の個人的な経験や道徳観に依存した対応によって倫理的に適切でない患者対応につながっていたり、また保健行政では、予防情報や検査・相談等へのアクセスを困難にしていたりするのではないのでしょうか。

JaNP+では、医療とセクシュアリティの関係に着眼し、シンポジウム「医療とジェンダー・セクシュアリティ」を開催しました。HIV/AIDSだけでなく他分野からも関係者を招き、医療・保健分野におけるジェンダー・セクシュアリティに関して当事者が直面する課題とは何か、その共通点と解決策を模索、共有しました。



主催:財団法人エイズ予防財団 事務局:JaNP+  
日時:09年3月20日(金) 会場:東京都渋谷区 津田ホール  
プログラム:講演およびパネルディスカッション

1. 花井十伍 (非営利NPO法人医療と人権(MERS)理事)  
「人権とジェンダー、セクシュアリティ」
2. 中村美亜 (セクシュアリティ研究者、『クィア・セクソロジー』著者)  
「各学問・実践領域間での『性』に関する認識の隔たり」
3. 松本亜樹子 (現在・過去・未来の不妊体験者を支援する会 NPO法人Fine代表)  
「不妊治療とジェンダー」
4. 長谷川博史 (日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス代表)  
「性まつわるスティグマと性感染症」

座長:服部健司(群馬大学大学院医学系研究科 教授)、生島嗣(社会福祉士、特定非営利活動法人ぶれいす東京 理事)

◎このシンポジウムは、平成20年度厚生労働科学研究費エイズ対策研究事業「介入困難群の予防・保健サービスへのアクセスに関する研究班」(研究代表者:服部健司)の研究発表会として開催されました。

## ◎参加者アンケートより

- さまざまな領域にいる人々が医療・ジェンダー・セクシュアリティというテーマをテーブルに広げて話す意義は大きいと感じました。
- 領域をこえたパネラーをコーディネイトされたこと、個々の確立した領域をおもちのパネラーの語りなど素晴らしかったです。継続して行って欲しいです。こういったことの積み重ねが、また社会を変えてゆく力になると思います。
- HIV/AIDSについてだけでなく、他の分野からの話も聞いたことで、より立体的に把握できたように思う。
- 一言では表現しがたいテーマを大切にやり続けている様子が伝わり感銘を受けた。
- 当事者に語らせなければならぬ現実ってどうなんだろうというお話もありましたが、やっぱり生の人の全体を想像するには、当事者の言葉がとても大切だと思います。

## 参加者レポート

じゅんぺい

HIVの陽性告知を受けたとき、真っ先に頭に浮かんだのは「またひとつ秘密が増えた」という負い目だった。「なぜHIVに?」病名に驚く人は必ずそこに興味をもつ。現在、日本国内にいるHIV陽性者の多くが男性で、その大半を同性とセックスをする人間が占める。いちばん秘密にしておきたい自分のセックスをさらされてしまうことは何より怖い。ならば黙って、自分を押し込めてひっそりと生きていく方がいい。

『医療とジェンダー・セクシュアリティ』のシンポジウムを聴きながら、私は自分の記憶を甦らせた。中でも不妊治療に取り組んでいるFine代表の松本さんがパネリストとしてコメントした内容は、非常に興味深いものだった。

日本では、妊娠を望んでいるにも関わらず2年以上も妊娠しないカップルが全体の10%程度いるという。数字で判断すればHIV陽性者の割合より多い。しかし「結婚してセックスすれば妊娠するのが当たり前」という認識が社会の中で広がっている現状では、彼女たちはマイノリティと受け取られ、他人の好奇心は「なぜ妊娠できないの?」という点に集中する。そこには「不妊は男性でなく女性側の問題」という根拠のない認識が介在している。実際には不妊の原因が男性側にあることも多いのに。

不妊治療を受けるにはプライベートなセックスライフをさらけ出さなければならないが、これはたいへんな羞恥心を伴うものだ。自分の生殖機能に自信を失う彼女たちの心の痛みは、女性に縁遠いはずの私にも想像できる。マイノリティだから被るのではない。画一化された“常識”こそが絶対的に正しいと思い込まされ、その“常識”と異なるものに対して無関心を生みだしてしまう、そのことが問題なのだ。

人間は誰もが教育を受けて成長し、その過程で価値観という自分なりの“モノサシ”を作る。最近、その“モノサシ”の真偽を疑ってかかってみることや、自分の“モノサシ”では計れない現実もあることに対して興味のない人たちが多過ぎるような気がしている。そして医療者の中にも同じような傾向が広がり、強まっていくとしたら、私たちはこれからも自分を押し込めて生き続けなければいけない。

HIV陽性者は人生の最後までずっと患者の立場にいる。30年後の私たちがケアしてくれるのはおそらく現在の子供たちだろうが、その子供たちに何かを伝えられるのは、現在を生きている大人の私たちだけである。



illustration:  
しらいしろう

a voice  
from  
friends  
of +

Column

抗レトロウイルス治療と予防

産経新聞編集委員 宮田一雄

国連合同エイズ計画 (UNAIDS) のミシェル・シディベ事務局長が就任後初の訪問先である南アフリカで行った演説の広報資料を訳していたら「曝露前予防 (pre-exposure prophylaxis)」という用語が出てきた。

《曝露前予防、マイクロサイド、ワクチン研究への継続的投資を行い、研究から得られたエビデンスを生かす》

曝露前はこの場合、「HIVに感染する前」の意味だろう。そもそも予防は、感染以前に行うから予防なのであり、だからこそ針刺し事故などでHIVに感染したかもしれないときに抗レトロウイルス薬を緊急に使う手法が「曝露後予防」と呼ばれるようになった経緯がある。「だいたい、ワクチンだって、マイクロサイドだって、基本的に曝露前予防ではないか」という疑問もあり、治療の専門家にお話をうかがった。

「いったい曝露前予防って、何を指しているの?」

まあ、聞いてよかったというか、国際動向に疎いことを改めて自覚したというか。治療と予防に関し、世界ではいま、大変な議論が持ち上がっているという。

実は、曝露前予防は曝露後予防をさらに展開させた発想で、HIV感染リスクの高い行動を繰り返す人にはあらかじめ抗レトロウイルス薬を予防的に服用してもらい、感染リスクの高いコミュニティ全体の感染の機会を減らしていこうという考え方のようだ。同様の発想から、HIVに感染した人にはとにかくHAART (多剤併用療法) を早く開始する。それが予防対策にも有効ではないかという議論もある。

薬剤耐性ウイルスの出現や副作用に対する懸念もあるが、耐性ウイルスが出にくいと期待される薬、副作用は小さいと思

われる薬の開発も進んでおり、昨年8月にメキシコシティで開かれた第17回国際エイズ会議あたりからにわかに議論が勢いづいてきたという。

さっそくネットで調べてみると、私の乏しいリサーチ網ですらそうした動きはすぐに把握できた。例えば、今年2月には「ART (抗レトロウイルス治療) の公衆衛生アプローチへの道」をテーマに第2回世界専門家会議 (サミット) がカナダのバンクーバーで開かれている。会議のサマリーと提言は近く公表されるということだが、概要説明には《会議の目標は、ARTの普及がもたらす個人的な利益と社会的な利益の最大化をはかるために必要な研究に関し、専門家のコンセンサスを得ることだ》と書かれている。

社会全体の予防効果という利益のために個人が犠牲にされるようなことを防ぐにはどうすべきか。治療は治療を受ける人の利益にならなければいけない。それが公衆衛生上の利益につながるかたちをつくりたい。そんな感じだろうか。つまり、そうした議論が必要なほど「個人」と「社会」の利害の対立が生じそうな領域ということでもある。

議論はいまのところ医療の専門家の主導で進められている。だが、治療を受ける主体に深く関わる問題だけに、HIV陽性者の意見も当然、反映されなければならない。とりわけ、現時点の陽性率は低くても、今後の感染拡大が懸念される国が多いアジアでは、予防が真っ先に強調される傾向が強いだけに陽性者の議論参加が不可欠だろう。日本国内ではどうなのか。JaNP+の皆さんにも、大いに関心のあるテーマになりそうだ。

APN+ 便利 from APN+

2008年、アジアの3ヶ国でHIV陽性者の全国ネットワークができた。

1つめはインドネシア。17,500もの島から成り、世界第4位の2億4千万人という人口を抱える国。成人のHIV陽性率は0.2%<sup>\*1</sup>と低いものの、アジアで感染者が増えている国の1つである。ART (抗レトロウイルス療法) の普及率は25%以下<sup>\*2</sup>と低く、陽性者の友人からは、地理的な条件から輸送などの問題もあり、ARTの継続的な確保が難しいという声が多く聞かれる。ARTの普及が目標には違いないが、実際、陽性者の活動となると、言語や文化、宗教などの多様性から、陽性者のグループ間にさまざまな軋轢があるようだ。今年のアジア太平洋地域エイズ国際会議 (ICAAP) はインドネシアのバリで行われる。APN+も全国ネットワークと、ICAAPの組織委員会を支援しているが、8月のICAAPの開催時には一つになった陽性者の声のきけることを期待したい。

2つめの国はベトナム。インドネシアと並んでアジアで感染者が増えている国である<sup>\*1</sup>。ただ、社会主義という体制の下で制限はあると推測されるが、これまで私が出会った陽性者とその活動から、個人としてもグループとしても、スキルや能力は非常に高いという印象を受けた。APN+はこれまで何度もベトナムの陽性者グループの要請に応じて、組織作りなどのスキルズビルディングのワークショップを現地で開いてきた。努力が実を結び、さまざまなグループがつながって、昨年、全国ネットワークが発足した。私と一緒にAPN+の

代表をしているDongがベトナムの全国ネットワークの初代コーディネーターとしてがんばっている。

最後はマレーシア。去年の7月に「myPlus」という陽性者のネットワークができたという知らせを聞いたものの、上記2ヶ国と比べて状況がつかみにくい状態である。

いろいろな陽性者のグループがつながれば、陽性者としてより強力なアドボカシーが可能になり、情報だけでなくスキルや経験が共有できる。各国のネットワークの設立と強化はAPN+の目標の一つである。

川名奈央子 (JaNP+)

\*1 UNAIDS Epidemic Update 2007 (2007)

\*2 Report on the global AIDS epidemic (UNAIDS, 2008)

活動報告 & 今後の予定 | Agenda

- 1月28日 (水) 第22回日本エイズ学会スカラシップ参加報告会を開催
- 2月1日 (日) スピーカー研修 (包括理解編) を開催
- 4月9日 (木) 第4回フレンズ+ミーティングを開催
- 6月 都内にて2008年度JaNP+活動報告会を開催予定。詳細が決まりましたら、WEBおよびE-mailにてご案内いたします。

編集後記 from editors

● PS3を購入。現実逃避のオモチャだったゲームも、今ではいろんな意味で現実世界を反映してて、なんだか微妙です…。 (高久)

● 「長期療養シリーズ」、ぜひ手にとってご覧下さい。HIV/AIDSの観点からはもちろん、読み物としても面白いですよ。 (神谷)

● 花粉症には縁の無い自分でしたが、ここ数年はなんとなく鼻がムズムズしたりしなかったり。いつ爆発するのかと毎年戦々恐々です。 (加納)

JaNP+ News Letter | No.6

編集 / 高久陽介・神谷浩樹・長谷川博史  
編集発行 / 日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス  
〒160-0014 東京都新宿区内藤町1-7 ホトクビル 402  
[TEL] 03-5367-8558 [FAX] 03-5367-8559  
[E-mail] info@janppplus.jp  
[ホームページ] http://janppplus.jp/  
イラスト / しらいしろう  
デザイン / 加納啓善 印刷 / 株式会社テンプリント